

円筒印章印影のイメージラリー

鯨井秀伸

はじめに

木村定三コレクションには、円筒印章とスタンプ印章の他に、少数ではあるが印章のない印影のみの資料が含まれている。それぞれの印影はゴム系粘土に捺されていてほとんどがコレクション中の印章の印影であるが、そのうち3点

は印章そのものがない資料である。印影のみの3点はどれもそのイメージに特質を持っている。印章がないため、その資料の同定に関し不明な部分は多いが、イメージの点からは大変興味深い内容のものばかりで、印章のないのが惜しまれる。それらは、怪獣を射る人物像(図1)、有翼のライオンそして両手に蛇を掴む人物像(図2、3)のイメージを持っている。ここではその内の1点の怪獣を射る人物像について、そのイメージラリー(註1)を辿ってみたい。



図1 木村定三コレクション



図2 木村定三コレクション



図3 木村定三コレクション

それについて考察する前に、他の2点について簡単に触れておきたい。両手に蛇を掴む人物像と有翼のライオンの印影は、形状から1箇の印章の表裏と思われる。これは別々のイメージを表したものとと思われるが、ひとつの統一したイメージを表裏に分離して配したものと考えられるからである。両手に蛇を掴む人物像については、いくつかの文明において類例が知られおり、それぞれ不詳の神格を描いたとされる著名な図像群が知られている。例えば、よく知られたクレタのものは女神であるが、本例はたくましい男のイメージを示し、美術史や考古学に親しんだ者にとっては一瞥して後

のヘラクレス像を想起させる特徴的なイメージを持ち、この種のイメージラリーの研究にとって大変興味深いものがある。このイメージ群の中で最も古い層に属すものに、メソポタミアの初期王朝時代、紀元前三千年紀の資料、イラクのカファジェ出土の凍石容器がある(図4:大英博物館蔵)。ここには2頭のライオンの上に立ち、両手に1匹ずつ蛇を掴むひとりの男が表されている(女と解しイシュタル神とする説もある)。ライオンも蛇も共に中央の男の方を向いている。このイメージは何らかの神格を表していると思われるが、その名は不明であり、イメージの細部について詳しいことは分かっていない。ただ、このイメージがライオンや蛇を打ち負かすほどの神格の力を表していることは疑い得ないことのように思われる。最も有毒な人類の敵を、広げた両手で統御する、神



図4



図5



図6

な存在の最強の力を象徴しているのである。また、ライオンの上に立ち、蛇を手に掴む女神を表す同様のイメージがエジプトに知られている(図5:ルーヴル美術館蔵)。これはシリアの女神カデシュの像で、エジプトの石碑に刻まれている。新王朝時代紀元前千年紀の資料である。このカデシュ女神のイコノグラフィーは豊穡の意味を担っている。紀元前1600年頃のクレタ文明にも蛇女神のイメージは現れ、洗練されたその像はクノッソス宮殿出土で中期ミノス文明に属すと考えられている(図6:イラクリオン考古博物館蔵)。

しかしながら、この神格の意味については確かなことは知られていない。

以上の数例からも本稿の印影に表されたイメージが蛇を掴む像のイメージリーにおいて古層に属す特徴的なものであることが理解される。そして表裏に分離された蛇を掴む像とライオンの像とが全く無関係なものではないということも推測しうるのである。おそらく統一的なイメージを表裏に分離させたものではないかと推測される。こうした意味においても本来の印章のいののが惜しまれるのである。

ニスルタのイコノグラフィー

ここで有翼の怪獣を射る像の印影(図1: no.2440.1)について考えてみたい。この資料は、石田氏によれば中期アッシリア時代(紀元前14-11世紀)、メソポタミアのものとされ、有翼のライオン・グリフィンを射る英雄と解釈されている。上部に星が、また下部に魚あるいは菱形状の物が描かれている。高さが40mmと比較的大きいが、印影から判断すれば径は小さいと思われる。また、石の種類や性質も不明であり、印影は摩滅のためか、擦し方の不良のためか細部が不明瞭な部分がある。例えば、人物の頭部について、冠なのか頭飾りなのかは明瞭ではない。冠の場合、単一の角なのか、多重角なのかも不明瞭であるが、他の例から類推しておそらく冠であろうと思われる。冠を被り有翼の人物が追い駆けるような身振りで矢を射ろうとしている。その前方には有翼のライオンのような怪獣が後ろを向き口を大きく開けながら逃げている。背景には上部に星があり、下部には人物像の後ろと怪獣の前に2匹の魚あるいは菱形状の物がある。星や魚あるいは菱形状の物についてのイコノグラフィーについては種々議論があるがここでは触れない。

このイメージには一見して類例を思い起こさせるものがあり、それはいくつかのパターンを持つニスルタ神(註2)の図像に非常に類似しているのである。はじめにこのニスルタに関するテキストを見てみよう。それは旧約聖書の記述である。『創世記』第10章8-12節には次のような記述がある。「クシュにはまた、ニムロド(Nimrod)が生まれた。ニムロドは地上で最初の〈勇士(a

mighty warrior)》となった。彼は、〈主の御前に勇敢な狩人(a mighty hunter before the Lord)〉であり、〈主の御前に勇敢な狩人ニムロドのようだ〉という言い方がある。彼の王国の主な町は、バベル、ウルク、アッカドであり、それらはすべてシンアル(Shinar〔Sumer〕)の地にあった。彼はその地方からアッシリアに進み、ニネベ、レホボト・イル、カラ、レセンを建てた。レセンはニネベとカラとの間にある、非常に大きな町であった。」

大洪水の後、箱舟から出たノアは農夫となりブドウ畑を作った。ノアの子孫としてはじめに記述されているのは、セム、ハム、ヤフェトの3人である。ハムの子孫は、クシュ、エジプト、プト、カナンであり、クシュには5人の子孫がいたが、またニムロドが生まれたのであった。このニムロドがここで取り上げるニヌルタに関連する。創世記の記述はニヌルタに関わる宗教的文化的経験を背景とした集団的記憶なのである。紀元前9世紀にニヌルタ(Ninurta)は、カラ(Kalah)にあるアッシュルナツィルパル2世の新首都の第1の神となったが、このカラ(カルフ: Kalhu)は現在ニムルド(Nimrud)として知られている。このことからニムルドのジククラトはニヌルタを祀った神殿と思われる。ニムルドはおそらくニヌルタの言語的転化と考えられるからである。このニヌルタ神殿は、その中の銘文によって識別されるが、この神殿はおそらく紀元前865年頃に建設されたと思われる、ニヌルタはその神殿を父エンリル(Enlil)と共有していたと考えられている。しかし、エンリルは常に表には出ないままだった。この神殿の入り口のひとつに表された浮き彫りの内の1点が大英博物館に所蔵となっており、それはニヌルタが神殿から怪獣を追い出す場面を表している(図7)。ニヌルタは走り、2本の稲妻を振りかざし、腰に剣を着け、特徴的な鎌を二の腕の肘の上から下げている。この浮彫の表現はどちらかと言えば静



図7

的であるが、この鎌はニヌルタの特定目立ったアトリビュートであったようである。本稿の印影に描かれたイコノグラフィーは、「アンズー(Anzu)を射るニヌルタ」として、以下に述べるように新バビロニア、新アッシリアの円筒印章に描かれているイメージに類似している。いくつかの点でこのイコノグラフィーと異なる、あるいは数種のアトリビュートを欠いたイメージではあるが、図様全体は「アンズーを射るニヌルタ」のものであると言える。ニヌルタの起源は紀元前三千年紀までさかの

ぼり、ニヌルタの地方形(local form)であるニンギルス(Ningirsu)と密接な関係があるとされる。ニヌルタは紀元前9世紀に現在ニムルド(Nimrud)として知られるカラ(Kalah)で、アッシュルナツィルパル2世の新首都の主神となったわけだが、好戦的な性格を持ち耕作の神でもあった。アンズーはシュメールのイムドゥグド(Imdugud)のアッカド名で、ライオンと鳥の特性(lionine and avian feature)を併せ持つ怪物である。新アッシリアおよび新バビロニアの円

筒印章には、ニムルドのニスルタ神殿入口に描写された場面の翻案が見られる。一般的には、ライオンの前足、雄牛の角、翼、蠍の尾、後足に猛禽の爪、そして時には4本の脚すべてに爪のついたライオン様の生物の背に乗って走るニスルタが描かれるが、鳥の尾を持つ怪物をアンズーとすることでは合意が得られているが、ニスルタがその上で走る生物については確定するのが困難とされているようである。以下にそれらのイメージャリーの数例を辿ってみることとする。

最も著名で典型的なニスルタは、すでに取り上げたニスルタ神殿の入口浮彫の《アンズー鳥を追うニスルタ(Ninurta chasing Anzu-bird)》である。図は浮彫に基づくT・リチャードの素描である。(図7)

新バビロニア様式の円筒印章には紀元前700年頃のもので大英博物館蔵の《蠍尾のライオン・ドラゴン(註3)の背に乗りアンズー鳥を射るニスルタ(Ninurta, on back of scorpion-tailed lion dragon, shooting at Anzu)》(ANE 129560)がある。この印章はニスルタに特有のアトリビュートをほぼすべて備えている。ニスルタはライオンの前足、牛の角、翼、蠍の尾、後足に猛禽の鉤爪を持ったライオンのような怪物の背に乗り走る姿で示されている(図8)。この図は、鎌がアッシリアの様式で示されているが、彫刻の方法はバビロニアの特徴を持つとされる。

新アッシリアの線様式の円筒印章には、紀元前800年頃の《蠍尾のライオン・

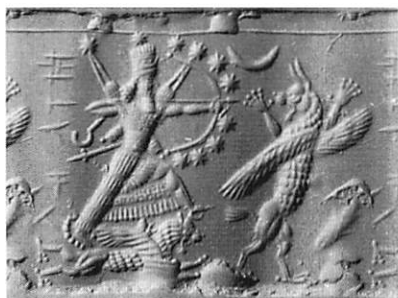


図8

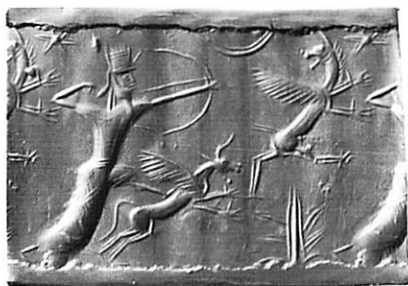


図10



図9

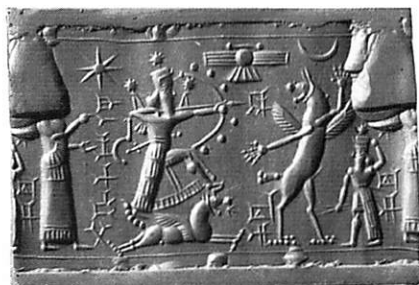


図11

ドラゴンの背に乗り、アンズーを射るニムルタ(Ninurta, on back of scorpion-tailed lion-dragon, shooting at Anzu)》が描かれており(ピアポント・モーガン図書館蔵)、作例としては珍しい資料である(図9)。

新バビロニア様式の円筒印章には、紀元前800年頃のベルリン近東博物館蔵《通例の尾のライオン・ドラゴンのいる、アンズーを射るニムルタ(Ninurta, with plain-tailed lion-dragon, shooting at Anzu)》(VA 7544)がある。これはバビロン出土である(図10)。

同様にベルリンの博物館蔵になる新アッシリアの円筒印章には《蠍尾のライオン・ドラゴンの背に乗り、アンズーを射るニムルタ(Ninurta, on back of scorpion-tailed lion-dragon, shooting at Anzu)》(VA 5180)があり、紀元前800年頃の印章である(図11)。これはアッシュールで発見され年記があることから制作年が判明しており、宦官の銘記のある紀元前812年のものとされる。

有翼の怪獣を射る英雄

以上上げた参考例を見ると、木村定三コレクション中の有翼の怪獣を射る英雄(no.2440.1)の印影がニムルタを表している可能性が高いことが理解されよう。ニムルタのイコノグラフィーについては、他に「稲妻を持つニムルタ」、「ニムルタと石との闘争」など数種のイメージ群が知られているが、ここに取り上げたのはそのうちの代表的な例のみである。また、その制作年代も紀元前800年から700年前後という限定された時代の資料のみを取り上げている。本印影にはニムルタに関するいくつかのアトリビュートの内、ニムルタが乗る有翼の怪獣が見られないが、これについては印章の下部が不明瞭なためそれが失われているのか、元々描かれていないのか不詳なままである。本印影に関連して、

印章の下部が失われてニムルタの状態が不詳なものが数例知られている。そのうちの一つに大英博物館蔵の印章があり、それは新アッシリア、紀元前800年頃のものである(ANE 89533:図12)。これはほぼ下半分が失われているが、図様の類似性からすると同じ大英博物館蔵の印章(ANE 119426:図13)と同様の図様を示し、ニムルタの配偶神のグラを伴うものらしい。また、フランクフォートは紀元前9世紀から8世紀のアッシリアの円筒印章で《英雄と鳥》として本印章と類似する資料を取り上げている。この場合「英雄」は「鳥」を追ってはいるが、いわゆる「怪獣」には乗っていないのである。本印章はこのようなイメージを持つ印章群に属し、そうしたイメージからの派生物あるいはニムルタのイメージ群に連なる印章の印影、または先行例としての印影として興味深い資料と思われる。



図12



図13

註

- 1) imagery[imidḡari] (imagerie[imazri])はイメージアリーと表記した。imageがすでにイメージとして表記されているためそれに合わせた。この表記は文学、特にシェイクスピア文学におけるイメージアリー研究等においてすでに用いられている。
- 2) Ninurtaはニヌルタとアッカド表記をし、ニンヌルタとはしなかった。以下、イシュタル、アンズー等も同様である。
- 3) lion-dragon ライオン・ドラゴン等はD・コロンの表記にしたかった。

参考文献

- J.E. Reade, 'The Ziggurat and Temples of Nimrud', *Iraq*, 64, 2002.
- J. Black and A. Geen, *Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia*, London, 1992.
- A. Annus, *The God Ninurta in the Mythology and Royal Ideology of Ancient Mesopotamia*, State Archives of Assyria Studies, XIV, Helsinki, 2002.
- D. Collon, *Catalogue of the Western Asiatic Seals in the British Museum, Cylinder seals II, III, V*, London, 1982.
- D. Collon, *First Impressions, Cylinder Seals in the Ancient Near East*, London, 1987.
- P. Taylor ed., *The Iconography of Cylinder Seals*, Warburg Institute Colloquia, The Warburg Institute, 2006.
- J. Black and A. Green, *Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia*, Univ. of Texas Press, 1992.
- Ch.J. Brunner, *Sasanian Stamp Seals in the Metropolitan Museum of Art*, 1978.
- H. Frankfort, *Cylinder Seals*, London, 1939.
- ドミニク・コロンの『円筒印章』久我行子訳 東京美術 1996年
- 日本オリエント学会編『古代オリエント事典』岩波書店 2004年